

連載「つたえること・つたわるもの」№181

はじまりの日本語——きこゆ・うたふ・かたる・つたふ「オノマトペ」。

出版ジャーナリスト 原山健郎

「オノマトペ（擬音語と擬態語）」は、原初の日本語、つまり日本語の卵である。すべての〈ことば〉はオノマトペから生まれた〈はじまりの日本語：やまとことば〉である。

まだ、言語（一定のきまりに従い、音声や文字・記号を連ねて、意味を表すもの）と呼べる

〈ことば〉がなかった時代に、「身振り手振り」（ボディ・ランゲージ。擬態表現）・自然の音や動物の鳴き声の「口真似」（擬音・擬声表現）などを使ってコミュニケーション（双方向の意思疎通）を図っていた。もちろん、英語やフランス語など外国語にもオノマトペがあって、それぞれの言語の原型（語源）となっている。

たとえば、各国の漫画（コミック）の吹き出し（オノマトペ表現）では、イヌの鳴き声「ワンワン」の英語はbow-wow（バウワウ）・woof（ウーフ）、フランス語はouaf ouaf（ウワウワ）、扉を閉める音「バタン」の英語はbang（バン）、フランス語はpan（パン）などの擬音語がある。また、お喋りの「ベラベラ」の英語はblah-blah（ブラブラ）、フランス語はpatata（パタタ）、針で皮膚をつつかれる感覚「ちくちく」の英語はprickle（プリクル）、フランス語はpiquer（ピケ）などの擬態語がある。

ちなみに、1960年代にNHK教育テレビ「おかあさんといっしょ」で放映された三匹の子豚の物語、『ブーフーウー』（長兄のブー、次兄のフー、一番下のウー、）のタイトルも、英語のオノマトペ「boohoo（ブーフー：赤ん坊のように泣きわめく）」からきている。

国立国語研究所のHP【日本語を楽しもう！
「擬音語・擬態語」にはどんな種類がある？】で

は、「擬声語」：わんわん、こけこっこー、おぎゃー、げらげら、ぺちやくちゃ等、「擬音語」：ざあざあ、がちゃん、ごろごろ、ばたーん、どんどん等、「擬態語」：きらきら、つるつる、さらっと、ぐちゃぐちゃ、どんより等、「擬容語」：うろうろ、ふらり、ぐんぐん、ばたばた、のろのろ、ぼうつと等、「擬情語」：いらいら、うっとり、どきり、ずきずき、しんみり、わくわく等、5つのオノマトペに分類している。

これらのオノマトペ（擬声・音語、擬態・容・情語）は、「きこゆ〔聞・聴（聴）〕・うたふ〔歌・謡（謠）：訴・訟〕・かたる〔語〕・つたふ〔伝（傳）〕の「話しことば」によってインプット・アウトプット（入出力+上書き）を繰り返しながら、〈はじまりの日本語〉になっていった。『字訓 普及版』（白川静著、平凡社、1995年）を参考にしながら、〈やまとことば〉の成立について考えてみよう。

たとえば、動物の鳴き声や自然界の音から生まれた擬音（擬声）語は、人間の耳で「聴く・聞える」→「きこゆ・きく（音声やことばを耳にききとる）」、叫び声や歌声であらわす「歌・唄・謡（謠）／歌う・訴える」→「うた（一定の節や拍子をつけて声を出して歌う）／うたふ（うたふ：相手に思いを訴える）」であり、ある感情やものの状態を音で表した擬態（擬容・擬情）語は、それを相手にわかるように「語る（説明する）」→「かたる（ことの次第を順序だて、形をつけて話す）」、たくさんの人たちに「伝える」→「つたふ（つた：鳶のように延びて、他に伝え知らせる）」と考えることができる。

英語のsong（歌）の動詞形sing（シング：歌う）は、古英語のsinganに由来し、とくに喜びや楽しみの中で「歌って伝える」ことを意味した。英語のtalk（トーク：語る）は、やはり古英

語の **talu** (内容をもった話をする、物語る) に由来し、中世英語では **tale** (テイル: 物語) のように用いられた。

また、〈やまとことば〉の「**かたる** (語)」には、「話す」意味もあるが、それは「**はなつ** [放・離・遣] (内なる心の思いを、口から〈ことば〉に出して解き放つ・切り離す・遣わす) ではないだろうか。

ここからは、〈もっと知りたい! 日本語〉シリーズの『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』(田守育弘著、岩波書店、2002年) を参考にしながら、少し長い引用になるが、文字どおり「目から鱗」のわくわく・どきどきするトピックがぎっしり! 日本語ならではのオノマトペ世界をさぐってみよう。

たとえば、オノマトペの中には、「ばりばり/ぼりぼり」のように、母音の違いによって区別され、よく似た意味を示すペアがある。母音の「あ」と「お」によるニュアンスの違いを比較してみると……、

煎餅を**ばりばり**かじる/豆を**ぼりぼり**かじる
鐘が {**がーん**/**ごーん**} と鳴る/風船が**ぼん**
と割れる/スプレー缶が**ぼん**と爆発する/柱に
頭を {**がつん**/**ごつん**} とぶつけた

(『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』「五音と意味の深い関係」146ページ))

なるほど、母音「あ」を含む「ばりばり」からは、「煎餅の一部が口からはみ出たまま」でかじる音、外に広がっているように感じる音がするが、母音「お」を含む「ぼりぼり」からは、「口を閉じたまま、口の中に全部ほおぼった豆」をかじる音、内にこもっているように感じる音がする。

また、たとえば、いちばん短い日本語のオノマトペは、「**ふ**と**思い出す**」「**つ**と**立ち上がる**」など、1モーラ(※拍: リズム上の単位)の語基(※意味的に中心になる部分) で表されるが……、

このように「**ふ**」とか「**つ**」など一モーラから成るオノマトペは非常に稀である。これに「**っ**」や「**ん**」がついたものなら、ぐっと数は増える。(□は「子音+母音」の一モーラを表す。)

「□**っ**」日光が**かっ**と差し込む。/電気が**ぱっ**と消える。/ **すっ**と頭から血の気が引く。/ **さっ**と顔色を変える。
「□**ん**」 **かん**と鐘を鳴らす。/収入が**ぐん**と増える。/シャンパンの栓を**ぼん**と抜く。
/胸が**きゅん**と痛む。

また、「**きゃー**と声をあげる」のように母音が長音化された形や、それに「**っ**」や「**ん**」の付いた形、「日光が**かーっ**と差し込む」「シャンパンの栓を**ぼーん**と抜く」もある。

一 (※1) モーラの語基だけから成るオノマトペが非常に稀であったように、二 (※2) モーラの語基だけから成るオノマトペの数も多くはない。(中略)

二モーラの語基に「**っ**」「**り**」「**ん**」が付いた形は一般的である。

「□□**っ**」糸が**ぶっつ**と切れる。/木の枝が**ぼき**と折れる。/地震で家が**ぐら**と揺れる。/真っ白い歯が**きら**と光る。
「□□**り**」糸が**ぶつり**と切れる。/木の枝が**ぼき**りと折れる。/地震で家が**ぐら**りと揺れる。/真っ白い歯が**きら**りと光る。
「□□**ん**」糸が**ぶつん**と切れる。/木の枝が**ぼき**んと折れる。/地震で家が**ぐら**んと揺れる。/真っ白い歯が**きら**んと光る。

『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』「三
創作実験」81～83 ページ))

かつて、兵庫県立大学教授だった田守さん
が、学生に「地震で家が（ ）と揺れた」の
() 内にオノマトペを入れる課題を与え、その
回答結果を語基ごとに並べたリスト（数字は回
答数）がおもしろい。

ぐらぐら 85 ぐらっ 83 ぐらり 19 ぐらん
2 ぐらぐらっ 2/ゆらゆら 22 ゆらっ 12
ゆらり 9/がたがた 39 がたっ 6 がたん 7
/みしみし 5 みしっ 3 (中略)

田守さんによる回答結果の考察を要約してみ
ると、おおよそ次のようになる。

★「擬態オノマトペ」である「ぐら」を語基に
もつ「ぐらぐら・ぐらっ・ぐらり・ぐらん・
ぐらぐらっ」は、いずれも家が激しく揺れる
様を描写している。「ぐらっ」と「ぐらり」
の揺れ方は、どちらもある物体が一度だけ激
しく揺れる様を表すが、「ぐらっ」は関わっ
ている動作が「ぐらり」よりもより瞬間的で
急な終わり方を表している。「ぐらり」は
「ぐらっ」よりもゆったり感じられる。

★「ゆら」→「ゆらゆら・ゆらっ・ゆらり」
は、比較的ゆるやかでゆっくりと大きく揺れ
る様を描写している。学生の回答結果になか
った「ゆさゆさ」は、何かに揺さぶられてい
るかのような揺れ方を表している。やはり回
答になかった「ゆらん」という形態のオノマ
トペはないからだと思われる。

☆「擬音オノマトペ」である「がた」→「がた
がた・がたっ・がたん」は、鉄筋コンクリー
ト造りの頑丈な建物が揺れる音ではなく、家
全体が揺れる際に箆箆など家具が震動する際
に生じる音を表す。

☆「みし」→「みしみし・みしっ」は、たとえ
ば木造の家自体がきしむ音を表している。

これまで列挙したオノマトペをみると、「促音
(かっ・ぱっ・すっ・さっ・ぽきっ・きらっ・
ぷつつ・ぐらっ・ゆらっ、がたっ)」、「撥音(ば
ん・ぼん・きゅん・がつん・ごつん・かん・ぐ
ん・ぷつん・ぽきん・ぐらん・きらん・がた
ん)」、「り(ほきり・ぐらり・きらり・ゆら
り)」、「長母音(きゃー・かーっ・がーん・ごー
ん・ぽーん)、反復(ぼりぼり・ぼりぼり・ぐら
ぐら・ゆらゆら・がたがた)は、日本語オノマ
トペに見られる音韻・形態的特徴といえる。

一般的に、オノマトペは（事物の状態を表
す）副詞として使われるが、「擬態オノマトペ+
する/擬態オノマトペ+つく/擬態オノマトペ
+めく・ける・まる・める」など、いくつかの
動詞の語尾と結びついて、豊かで多彩なオノマ
トペワールドを形成する。

◆「擬態オノマトペ」+する

はっとする ほっとする すっとする かっ
とする むっとする/しゃんとする しんと
する つんとする ばんとする (例 ばんと
したホテル) /ばたばたする ときどきする
にやにやすする はらはらする/ぐったりする
さっぱりする むつつりする うっとりする
/ぼんやりする げんなりする しんみりす
る うんざりする/にこっとする すかっと
する きちっとする うかっとする/がらん
とする つるんとする だらんとする どん
んとする/うろちよろする どぎまぎする
どたばたする のらくらする

◆「擬態オノマトペ」+つく

ばさつく いらつく べとつく もたつく ぐ
らつく ふらつく/むかつく がさつく がた

つく ばたつく ねばつく ごろつく

◆「擬態オノマトペ」+めく・ける・まる・め

る ※←「反復形のオノマトペ」の動詞化

はためく (※はたはた) ゆらめく (※ゆらゆら) きらめく (※きらきら) よろめく (※よろよろ) ざわめく (※ざわざわ) /いじける (※いじいじ) よろける (※よろよろ) にやける (※にやにや) とろける (※とろとろ) だらける (※だらだら) /ゆるまる・ゆるめる (※ゆるゆる)・くるまる・くるめる (※くるくる)

『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』(「二オノマトペの使い方」59・60・62・63 ページ))

上古代の日本人が〈つたえる・つたわる〉コミュニケーションを図った〈はじまりの日本語・やまとことば〉は、文字(書く)・閲読(読む)の〈書きことば〉ではなく、音声(話す)・聴取(聴く)〈話しことば〉だった。

そして、たとえば「ぐら(語基)」→「ぐらぐら(反復) /ぐらっ(促音) /ぐらん(撥音) /ぐらり(り) /ぐらっとする(+する) /ぐらつく(+つく)」のように、同じカテゴリー(「ぐら」の仲間)であっても、「ぐら」と揺れる微妙なニュアンスの違いを〈つたえる〉、同じ日本語話者であれば暗黙知として〈つたわる〉、そして、私たちの人生をやさしく「つつむ」/たいせつな人とのきずなを「むすぶ」/〈はじまりの日本語〉で「つなぐ」、「オノマトペ」のすばらしさが、ここにある。

さて、突然のお知らせです。2016年9月から7年7カ月(月2回執筆)の間ご愛読いただいた本コラム「つたえること・つたわるもの」は、本日3月26日をもって、連載を終了することになりました。

すでに、本コラム140回『まあるく・やわら

かい日本語、「ひらがな」のリズムで息をする。』(2022年7月12日)に書いたものですが、その冒頭の一文を、「気になる日本語/ゆかいな日本語/ためになる日本語/はじまりの日本語」シリーズを締めくくる〈ことば〉として、そして、本コラム最終回にふさわしい〈ことば〉として再録し、ゴム報知NEXTをご愛読の皆さまにお届けいたします。

「私たちはある国に住むのではない。ある国語に住むのだ。祖国とは国語だ。それ以外の何ものでもない(英語訳 One does not inhabit a country; one inhabits a language. That is our country, our fatherland -- and no other.)」と言ったのは、ルーマニア出身の思想家、エミール・シオランである。

シオランがいう「ある国」とは、私たちにとっては日本の「国土(country)」、「ある国語」とは「日本語(Japanese language)」のことであり、先祖代々現在に至るまで、そのことば(日本語という国語)によって紡がれてきた言語的・文化的な揺り籠(粹組み)が「祖国(our fatherland)」だということになる。

もちろん、日本の「国語」といえば、「漢字かな交じり(漢字+ひらがな+カタカナ)文である「日本語」をさすのだが、私たちが胎児の時代に胎内で聴いた話しことば、「ひらがな」のオノマトペで伝わる母語(人生で初めて出会ったことば=mother tongue)としての〈やまとことば〉こそが、本当の意味での原初の「国語(national language)」であり、その場所(母胎)とは、シオランがいう「祖国(fatherland)」ではなく、「母国(生まれたところ=mother country)」という表現のほうが似つかわしい

長い間、ご愛読いただき本当にありがとうございました。